



高林式茶葉粗揉機（昭和9年型）

製茶機械を発明した高林謙三は、天保3年（1832）に高麗郡平沢村（現日高市）に生まれました。若くして江戸の権田直助や佐倉の順天堂佐藤尚中に医学を学び、安政6年（1859）に入間郡小仙波村（現川越市小仙波町）で医院を開業しました。その傍ら明治2年（1869）頃より茶業にも手を染め、茶園を開いて茶の生産を始めました。やがて手揉み製茶の限界を感じ、製茶機械の発明を構想するようになります。謙三が製茶機械の発明に転じた動機は、開国以来の代表的輸出品目である茶の輸出が伸張するなか、従来からの手揉み生産ではその需要に対応できないことをいち早く認識したからに他なりません。

明治11年頃から製茶機械の発明に没頭した謙三は、試

行錯誤の結果、明治18年から19年にかけて、生茶葉蒸器械・焙茶器械・製茶摩擦器械・改良扇風器械・茶葉揉捻器械で特許第2・3・4・60・150号を取得しました。その後謙三は、自宅を全焼するなどの困難のなかで研究を続け、明治31年に茶葉粗揉機を完成させて特許第3301号を取得しました。高林式茶葉粗揉機は、静岡県掛川町（現掛川市）の松下幸作と製造、販売の特約を結び、松下工場生産されて全国に販売されました。

この高林式茶葉粗揉機は、昭和9年に松下工場で作られたものです。当初の手回し式から動力式へと改良が加えられていますが、基本的構造は同じです。謙三の考案した粗揉機の揉み手は、現在の機械にも受け継がれています。

川越の映画館の変遷

平成15年7月19日～9月7日まで開催した第13回収蔵品展は、「暮らしの中の映画」と題し映画のポスター・チラシなど映画に関する資料を展示しました。そのなかで、川越の劇場・映画館の変遷についても併せて展示したところ、多くの情報が寄せられました。ここでは、それらの情報をもとに、川越の映画館の変遷についてたどってみたいと思います。

1. 明治・大正・昭和初期の劇場・映画館

●松連座

川越の劇場史は、芝居小屋の松連座に始まります。明治初期には蓮馨寺境内にありました。明治18年(1885)の「武州川越繁昌店万代鏡」にも「レン雀丁ゲキ場松連座」として載っています。川越氷川神社祠官山田衛居(1849～1907)の『朝日之舎日記』の明治19年10月23日の記事にも「家内拳テ松連座芝居一見」とあります。『朝日之舎日記』明治19年10月19日の記事にも「頃日春木座之安芝居大当り」「当地芝居アリテ以来之大入也」とあります。春木座は東京の芝居一座で松連座で興行していました。この当時、芝居が盛んに行われていたことが窺えます。しかし、松連座は明治26年3月の川越大火によって焼失してしまいました。

●川越座(鶴川座)

川越大火翌年の明治27年6月に川越町の有志50余名が発起人となり、川越座が建設されました。その後、明治33年5月に鶴川座と改称され、興行していました。川越北尋常小学校編『郷土誌』(明治44年)によれば、「鶴川座一家屋構造 木造亜鉛葺 二階建 一ヶ年間興行回数(平均)約拾貳回 一ヶ年間入場人員約参万六千 一ヶ年間入場料約参千六

百円」と書かれています。多くの人で賑わっていた様子を窺うことができます。その後、大正時代に入ると、活動写真も上映されるようになりました。大正5年(1916)前後のものと思われる「川越鶴川座」の絵葉書によると白漆喰で瓦葺の建物が映っています。建物の前に幟を立て、看板が立て掛けられ、着物の人々が列をなしている様子がわかります。その後の大正11年の「大日本職業別明細図之内川越町・大宮町・所沢町」の裏面に載っている鶴川座の写真は、洋風造りとなっています。

●おいで館(川越演芸館)

明治38年に、川越町の有志が合同出資して本町(現元町)に建設した寄席の一力亭から始まります。その後、花春亭、杳玉亭と改称した後、明治40年においで館と改めて興行をしました。上記明治44年『郷土誌』にも「おいで館一家屋構造 木造鉄板葺平屋 一ヶ年間興行回数(平均)約拾回 一ヶ年間入場人員 約七千五百人 一ヶ年間入場料約七百五十円」と記されています。おいで館は、現在のスカラ座の前身とみられ、大正10年に近くの江戸町(現大手町)に移り、川越演芸館と改称しました。この頃は、活動写真を上映していました。今回の収蔵品展では当時川越で活動弁士をしていた大野秀峰の台本を展示しましたが、それは大正13年から昭和6年までの川越演芸館と鶴川座の台本でした。これらの中には「餅搗興行」と題して、年末に神山華翠などの人気弁士を集めて興行していた時のものもあります。大正期は活動弁士が活躍した時代でもありました。昭和に入り、戦争の色が濃くなった昭和15年頃に川越演芸館は、川越松竹館に名称が変更されました。

●川越電気館

川越町の有志による株式会社方式で、大正3年株式会社川越電気館が設立され、大正4年に活動写真専門館として営業を始めました。大正3年8月の「株式引受人総会決議録」(古谷上松本家文書)に「創立委員ハ現川越電気館タル高等演芸場ハ株式会社川越電気館ニ於テ現形ノ俣付属营造物一切ヲ付シ金壱万七千円也ヲ以テ権利者ヨリ買取スル」とあり、大正3年以前にも演芸場として川越電気館が存在したのではないかと推測できます。大正3年12月8日『収支損益表』(同文書)によると、大正3年4月～10月の7ヶ月間に実験として活動写真の興行を行い、興行日数205日収入金額約8602円、一日当りの収入は、約41円となっています。同じ文書に「経費予算書」も書かれており、電灯料、写真料、



絵葉書「川越鶴川座」(齊田美昭氏蔵)



「川越電気館」(「武州川越仙波喜多院」より)(斎田美昭氏蔵)

「川越電気館」(「武州川越仙波喜多院」より)(斎田美昭氏蔵)

弁士4人、見習い2人、楽手5人の給料に看板書料(月4回半平均)などの経費が一日平均金32円の経費がかかるとされています。大正5年3月の「第壹回第式回営業報告」(同文書)の中の大正4年度第1回損益勘定表には大正4年4月1日～6月20日までの収入として「本館興行収入・各地巡業収入・開館式祝儀及株券書替手数」とあり、この間に開館したことがわかります。また大正4年12月のチラシには「一月一日より昼夜開館」と書かれており、新年の口演も載せてあります。それには「内外の修理装飾を決心し写真は東京エムカシー商会の特作品を選び、弁士、声色、嘶方何れも東都に於て斯界の霸王を網羅致候」とあり、チラシを配布して入場者を増やそうとした姿が窺われます。しかし、経営が厳しく数年で閉館してしまいました。

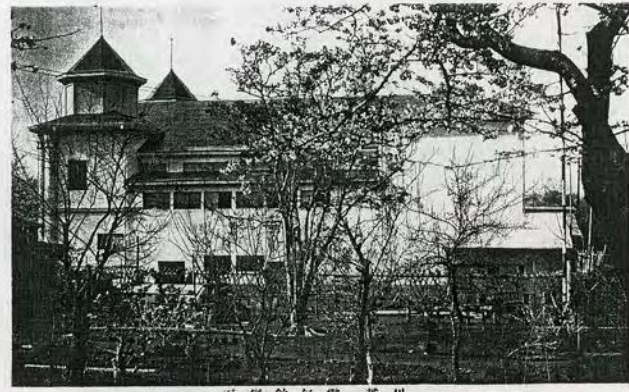
今回展示した「武州川越仙波喜多院」の銅版画に、喜多院北側参道に洋風造りの三角塔の屋根が二つある建物が描かれています。これは、その位置から川越電気館とみられていましたが、「川越電気館側面」の絵葉書が存在していることがわかり、それにも同じ形の三角塔の屋根が二つ写っていたことから、この建物が川越電気館だと断定することができました。

●舞鶴館

鉄砲町(現松江町)にあった舞鶴館は、大正11年の「大日本職業別明細図之内川越町・大宮町・所沢町」には載っていませんが、大正13年の「川越市全図」には載っていることから、その頃開設したものと思われます。織物市場に隣接し、歌舞伎座を模したものでした。ここでは、松旭斎天勝の奇術ショーや、レビューなども行われました。その後、昭和15年頃に東宝劇場と改称し、昭和19年頃には文化劇場と改称しました。戦後には、文化映画劇場と改称し、建物とともに文映として親しまれていました。

2. 戦後の映画館

戦後、映画製作が盛んになるにつれて、全国の



「川越電気館側面」

絵葉書「川越電気館側面」(杉崎俊和氏蔵)

映画館も急増しました。川越の映画館も同じように増加しました。戦争中も存続していた鶴川座(昭和35年に川越日活劇場、その後、川越プラザに改称)、川越松竹館(昭和38年にスカラ座と改称)、文化映画劇場の他に、昭和25年に川越ホームラン劇場ができると、次々と新しい映画館が開設されました。最も多い時には市内に7館も映画館がありました。

●川越ホームラン劇場

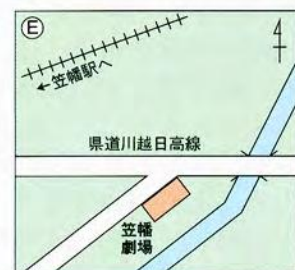
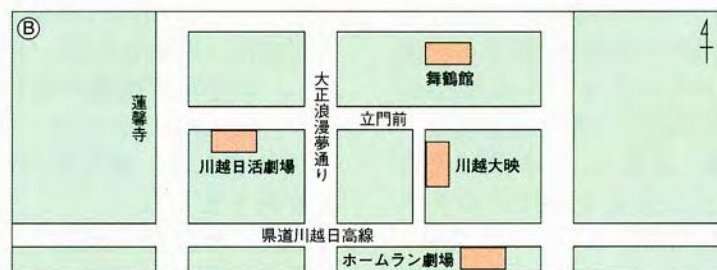
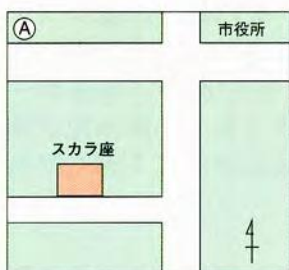
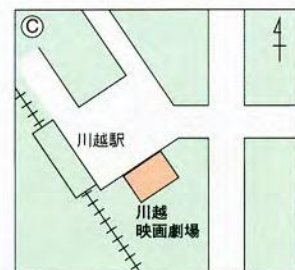
昭和25年に、川越ホームラン劇場として松江町に開設されました。東映の作品を中心に上映していたため川越東映ホームラン劇場ともいいました。昭和35年頃は日本映画の最盛期でした。当時の写真には、劇場に看板が掲げられ、劇場の前が映画館入場者の自転車で埋め尽くされている様子が写っています。

●川越大映

川越大映は、昭和31年蓮馨寺立門前通りにセントラル劇場として開設されました。当初は洋画を専門に上映していましたが、程なく大映の直営館となり川越大映と名を変えました。当時、蓮馨寺境内はサーカスや見世物などの興行が行われ、周辺の4つの映画館とあいまって、娯楽の中心として賑わっていました。



「川越ホームラン劇場」写真(シアターホームラン蔵)



●川越映画劇場

川越映画劇場は、昭和31年11月に川越駅前に開設されました。二階建てで最新のシート張り座席で定員350席、ワイドスクリーンに当時としては最新式の映写機を導入し、大型映画館をめざして開設されました。しかし、当時の川越の繁華街といえば、銀座商店街（現大正浪漫夢通り）や蓮馨寺周辺で、川越駅周辺は、今日ほど賑わっていませんでした。そのため、市内を無料で循環するバスを用意していたそうです。川越映画劇場では日活・東宝系の映画を上映していました。日活映画が石原裕次郎の登場後、全盛期を迎えたため、ここで日活映画を見た思い出のある人も多いようです。

●メトロ劇場

南町（現幸町）、現在の蔵造りの町並みにも映画館がありました。メトロ劇場といい昭和31年12月に開設されました。蔵造り建物を利用した映画館で、開設当時は時代劇などを上映したそうですが、程なく閉館となってしまいました。

3. 笠幡劇場と的場劇場

この他、市内には霞ヶ関地域に笠幡劇場と、的場劇場がありました。笠幡劇場は「全日本映画館録—1958年版」（キネマ旬報社）に「木造2階定員320名」と記されています。南小畔川の中州にあり、50坪ほどの小屋のような建物だったといえます。映画は、鶴川座からフィルムを借りて上映

していたそうです。当時のことを知る人によると昭和10年頃からあったといいます。週2日の上映で、夜だけの上映だったようですが、近在の人々の娯楽場として賑わっていました。昭和34年の台風によって劇場の屋根が飛び、閉館になったそうです。また的場劇場は、笠幡劇場と同じ支配人がJR的場駅近くにテントを張り入場料をとって、映画の上映を行っていました。ここは、月に2、3回夜だけの上映でした。上映日には、ラッパなどで近所に知らせて回っていたようです。この劇場も、昭和35年頃に廃業してしまいました。

4. 現在の映画館

昭和40年前後、川越の映画館は次々と閉館しました。昭和31年には市内に7館もあった映画館ですが、昭和37年頃に川越文化映画劇場が閉館となり、昭和39年に川越映画劇場が、昭和40年には川越大映劇場が、平成10年には長い歴史を持つ、鶴川座（当時は川越プラザ）が閉館しました。

現在、川越市内の映画館は、昭和62年に3つのスクリーンを持つ映画館となった「シアターホームラン」と、昭和38年に洋画専門館となった「スカラ座」の2館となってしまいましたが、市民に親しまれる映画を上映し続けています。

終わりに、今回の収蔵品展に際し、御教示いただきました多くの方々に深く感謝いたします。

一番蔵外壁 修繕完了

平成14、15年度にわたる事業計画で、蔵造り資料館一番蔵（文庫蔵）の外壁修繕が行われ、無事完了しました。

一番蔵の外壁は雨水が壁内部に侵入し、^{かび}黴が発生したため、本来、白くあるべき壁が、全体に黒ずんでしまいました。このような状態になると建物の構造そのものに悪影響を与えてしまいます。そのために、緊急措置が必要となったわけです。

長期にわたり、入館された方々をはじめ近隣の皆様にもご迷惑をおかけしました。しかしながら、皆様のご理解により、無事終了できましたことを厚くお礼申し上げます。



ます。

最後に、見違えるほど美しくなり、青空とのコントラストが非常に映えるようになりました一番蔵の姿を御覧いただけたら幸いです。

分館 だより

本丸御殿の模型

本丸御殿に新たな展示品が加わりました。本丸御殿の精巧な手作り模型です。この模型を作り、寄贈していただいた方は、川越市砂新田の山本喜久男さんです。

山本さんは、現存の本丸御殿と家老詰所に、資料から当時の姿を推定した客殿を加え、60分の1の大きさに復元しました。何度も本丸御殿に足を運び平面図を起し、構想から完成まで2年をかけたそうです。

模型の材料には段ボール、つまようじ、菓子折りの箱など身の回りにあるものが使われています。屋根や^{ひさし}庇は取り外すことができ、内部を見ることができます。外観



はもちろん欄間の装飾、床の間の置物などに至るまで気が配られ、とても素晴らしい仕上がりです。

ぜひ皆さんにも御覧いただきたいと思います。



(平成15年10月13日に行われた石田の獅子舞)

石田の獅子舞

川越市北部の石田地区では、4月の春祭り（定期・昼）と、7月の天王さま、10月14日のオヒマチ（両方とも不定期・夜）に地元の藤宮神社で獅子舞が行われています。かつては、4月に行われる祭りは春祈禱と呼ばれ、村に入ってくる災難を防ぐためにフセギの獅子が出て村回りを行いました。この村回りでは、子ども達が縄を持ち寄って大きな輪を作り、これを先頭に鉦・太鼓・山の神・獅子・氏子の順に行列を作って各戸を回り、厄を払ったといいます。現在は村回りはせず、神社境内での獅子舞の奉納のみとなっています。

この獅子舞は、道具を取める長持に天明5年（1785）の銘が記されており、江戸時代から行われていたことが分かります。以来、中断と復活を繰り返してきました。最近では、平成10年に獅子舞が復活してからは、保存会が中心となって運営しています。保存会では、獅子舞の技術習得に励むとともに後継者の育成にも取り組み、また地元の囃子連ともうまく連携しながら伝統ある行事を継承しています。

獅子舞の特徴は、市内各地で行われている獅子舞と同様、獅子頭を1人でかぶり、3人1組で舞う「三匹獅子」といわれるものです。3頭の獅子は、親獅子（雄）、女獅子（雌）、子獅子（雄）と呼ばれ、山の神が獅子を導く仲立役となります。また、花笠をかぶったササラッコには4人の少女があたり、これらに笛吹きと歌手が加わります。演じられる曲目は一庭一曲形式というもので、獅子歌が次々とうたわれていきます。「ほめ言葉」も残っており、途中、場が盛り上がってきた中盤で、ほめ言葉と返し言葉が取り交わされます。

常
設
展
示
室
か
ら

埼玉県指定文化財

丸木舟

ここに紹介するのは、原始・古代コーナー最大の展示品、縄文時代の丸木舟です。

この丸木舟は、昭和27年、市内老袋の入間大橋上流約300mの地点で発見されました。この年の夏、台風により入間川が増水して岸辺が削られ、この舟が崖面に現れたそうです。舟の出土した地層からは、縄文時代後期の土器の破片とともにハス・オニグルミ・ヒシなどの実が発見されました。

丸木舟は現在、舟尾の一部を欠損していますが、全長5.4m、最大幅54cmを測り、全国的に見ても大型の部類に入ります。形は舟首と舟尾が丸みをおびた鱗節形と呼ばれるもので、舳先が大きく反り返り、非常に堂々としています。

この丸木舟のもうひとつの見所は、縄文人の木材加工の技術が、理解出来ることです。この舟は芯持ちの櫃の丸太をまるまる使い、内側を削って舷側を作り出しています。舟の内側をご覧ください。削られた内側のところどころに黒く焼け焦げた箇所が見られます。

この時代、木材の加工には、磨製石斧が多く用いられていました。しかし、この磨製石斧だけで丸木舟を削っていくことは容易ではありません。そこで縄文人は、加工途中の丸木舟の上面で火を焚いて炭化させ軟らかくした上で、舷側部を削り出していったのです。

この舟は、他の出土例に比べて、舟底・舷側とも厚手で、製作の途中で放棄されてしまったものと考えられます。

今からはるか4,000年前、川越の縄文人たちは出来上がった丸木舟でどこへ漕ぎ出そうとしていたのでしょうか。興味もたれるところですよ。



Information

平成16年3月までの予定です。

講) 座) ・ 教) 室) e) t) c).

| 行事 | 日程 | 申し込み |
|-----------------------------|-------------------------------|------------------|
| 歴史講演会 城・館に焦点をあてます。 | 2月15日(日) 2月29日(日) | 2月1日(日) 午前9時～ |
| 子ども博物館教室 「昔の織物に挑戦」 | 2月21日(土) 2月22日(日) | 2月4日(木) 午前9時～ |
| 博物館歴史講座 「近代化へのあゆみ 川越と深谷」 | 3月11日(木) 3月18日(木) 3月25日(木) | 3月1日(月) 午前9時～ |
| 野外博物館教室 「伝説のルーツを探る」 | 3月20日(土) | 3月3日(木) 午前9時～ |

*変更の可能性もあります。申し込み方法も含め、詳細については、「広報川越」を御覧ください。お問い合わせは、博物館まで。

土曜 体験教室

毎月、第2土曜日・第4土曜日に開催しています。
博物館に遊びに来てください。

- 場所 川越市立博物館
- 時間 午前10時～11時30分と
午後1時30分～3時30分

平成15年 12/20 お正月飾りを作ってみよう

平成16年 1/10 たこを作ろう

1/24 たこを作ろう

2/14 昔の単位ではかってみよう

2/28 昔の単位ではかってみよう

3/13 昔のおもちゃ作り

3/27 博物館フォトラリー

- 申し込みは不要です。当日、直接博物館へお越しください。
 - 参加のための入館は無料です。
- ※詳細は当館にお問い合わせください。

ご紹介

〈博物館受付でお求めいただけます〉



三十六歌仙額は、国指定重要文化財で東照宮に奉納されたものです。歌人は中務と大伴家持です。



古墳に並べられた、さまざまな姿の埴輪。その謎にせまります。



市内各地に受け継がれてきた大山信仰の多様な姿をご紹介します。

第14回ミニ展

むかしの勉強・ むかしの遊び

平成16年1月20日(火)～3月7日(日)



むかしの勉強



むかしの遊び

特別
展示
室
の
観

小学校3年生の社会科学習にあわせた展示です。地域の人々の暮らしの移り変わりを生活道具・遊び道具等からたどります。

昭和30年～40年代の教室・居間・台所や駄菓子屋の店先の再現を行うほか、教科書や文房具・電気洗濯機・白黒テレビ・ブリキのおもちゃ等を展示いたします。(大人の方には、なつかしさを存分に味わっていただけることと思います。)

皆様の御来館をお待ちしています。

第23回企画展「刀工 藤枝英義とその時代」

平成16年3月27日(土)～5月5日(水)

幕末は、外国船の脅威・内政の混乱・勤皇思想の高揚などにより日本が大きく揺れ動いた時代です。諸藩では、武備増強のため、腕のよい刀工を召し抱えました。この企画展では、川越藩工の藤枝英義とその一門の作刀を通して、幕末という時代を見直してみたいと思います。

利用の御案内

◆入館料

| 区分 | 博物館 | 川越城 本丸御殿 | 川越市 蔵造り資料館 | 共通入館(観覧)券 | | |
|------------|----------------|---------------|---------------|------------|--------------------|------------------------|
| | | | | 博物館 美術館 | 博物館・本丸御殿 蔵造り資料館 | 博物館・本丸御殿 蔵造り資料館・美術館 |
| 一般 | 200円 (160円) | 100円 (80円) | 100円 (80円) | 300円 | 300円 | 450円 |
| 大学生 高校生 | 100円 (80円) | 50円 (40円) | 50円 (40円) | 150円 | 150円 | 220円 |

●() 内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合。

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日は除く)、毎月第4金曜日(休日は除く)、
休日の翌日(土・日曜日は除く)、年末年始(12/28～1/4)、
館内消毒(6月下旬)、特別整理期間(12月中旬予定)

●開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも同様。
(館内消毒・特別整理期間は、博物館のみ休館)

交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より
または西武新宿線 本川越駅より
東武バス 「札の辻」下車徒歩8分
・御来館の際は、なるべく電車・バス
を御利用下さい。

発行日 平成15年12月8日

発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1 ☎ 049-222-5399

FAX 049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

http://www6.ocn.ne.jp/~kawahaku/